

書評と紹介

伊藤セツ著

『クララ・ツェトキーン

——ジェンダー平等と反戦の生涯』

評者：高田 実

ある人物の生きざまをたどることは、歴史を理解するもっとも有効な方法である。時代の精神が、歴史の主体にどのように内在化されているかを知ることで、歴史の動的な理解を可能にするからだ。構造や制度は自己展開しない。人によって媒介されるのである。また、人物の歴史は、当時は実現されなかったものの、その後の歴史において参照系として言及される選択肢、つまり「歴史の可能性」を描くことができる。第20回（2013年）社会政策学会学術賞に輝く、1,000頁を超える文字通りの大著は、ジェンダー平等と反戦を貫き通したマルクス主義的女性解放運動家、クララ・ツェトキーン（1857～1933年）の生涯をたどることで、このことを教えてくれる。

この本の目的は二つある。ひとつは、クララの「人物の実像」に迫ることで、彼女が果たした歴史的役割を明らかにすること。もうひとつは、彼女の女性運動に関する「発言や著作、行動や生き方」が、「世界のジェンダー平等の運動や現在の日本の『男女共同参画』の実現に連なるもの、寄与するもの」は何かを検討する

ことである。

著者は、基本的にはクララの生き方を時系列的にフォローする。本の構成は、序章、「第I部 おいたち・青春・亡命——ヴィーデラウ・ライプツィヒ・パリ（1857～1890）」（第1章～第4章）、「第II部 ドイツ社会民主党と第2インターナショナル——シュツットガルト時代（1891～1914）」（第5章～第10章）、「第III部 戦争と革命」（第11章～第16章）、終章という3部構成である。

第I部では、まず、農村ヴィーデラウ村で、中流下層の「ある程度の知識層」で生まれ育ち、職業的専門教育を受けたクララの少女時代と当時の女性問題をめぐる情勢（第1章）、1872～81年のライプツィヒでの青春時代における教育と、社会主義者鎮圧法が制定される時代におけるロシア人亡命者オッシブ・ツェトキーン（最初の夫）との出会いによる思想的転換（第2章）が描かれる。これに続き、1881年のパリ亡命（第3章）とそこにおける本格的な文筆・演説活動が描かれる（第4章）。とりわけ、パリ時代に女性解放思想に強く惹かれ、独自の思想を生み出す基盤が形成されたことが示される。

第II部は、シュツットガルトでの24年間を描く。ドイツ社会民主党と第2インターナショナルの女性問題の主導的人物としての成長と活躍を追う。とりわけこの時期には、『平等』の編集者として（1891～1917年）、ローザ・ルクセンブルグとならんで、ドイツ社会民主党の女性問題担当としての地位を不動のものとする（第7章）。また、彼女は創設されたばかりの第2インターでも活躍し、国際的な影響力を発揮する（第8章）。それを示すもののひとつが

「国際女性デー」の普及である。後代への影響の大きさを考えて、この記念日をめぐる伝説と実像については、1章を割いて考察がなされる(第9章)。また、彼女ばかりではなく、当時の女性解放運動家のバイブル、アウグスト・ベーベルの『女性と社会主義』にクララがどのように向かい合ったのか、詳細に検討される(第10章)。

第Ⅲ部は、第一次世界大戦とロシア革命、ドイツ革命の激動のなかを生きるクララの姿が描写される。彼女は社会民主党から共産党へと活動の基盤を移す。大戦と革命の時代における女性問題がどのような課題を抱えていたのかを概観した後(第11章)、コミンテルンとその支部としてのドイツ共産党の間で、板挟みになりつつも、運動を進めるクララの奮闘が示される(第12章)。社会主義がロシアにおいて実現するが、指導者レーニンにクララはどのように接したのだろうか。二人の論争と対話を契機にしつつ、クララが女性解放運動家として円熟味を増し、国際共産主義運動のなかで地歩を不動のものとしたことが示される(第13章)。特に、第11章で詳しく論じられる、1915年春の国際社会主義女性会議におけるレーニン決議案対クララ決議案の攻防の分析は圧巻である。「戦争を内乱へ」だけではすまない、困窮した女性の生活の現実を踏まえたクララの平和主義的で、実践的な問題提起には、今日にも通ずる問題が含まれていた。コミンテルン時代については、コミンテルン大会と国際共産主義女性会議での活躍を中心にして整理される(第14章)。スターリン時代におけるクララの歴史的役割をどのように評価すべきか。「加害者にして被害者」などという曖昧な指摘を乗り越えつつ、葛藤するクララの姿が描かれる(第15章)。著者は、1927年(70歳)～33年(76歳)を彼女の晩年と位置付け、古い

と病氣と闘いつつ、周囲の人間たちと交わした対話、自己の内的葛藤を、手紙の紹介を中心として跡付ける(第16章)。

終章では、本書の目的に対して結論が示される。第1点、「人物の実像」については、まず出自と学びの場が重要であり、家庭環境を背景としつつ、「しっかりとした職業教育」に接するなかで「自分が選ぶべき思想の主体」を確立するとともに、パリの実践運動のなかで「自力でマルクス主義を選びとっていった」ことが指摘される。このような主体的な思想形成の大きな促進剤となったのが、交友関係と出会いである。著者は、ローザ・ルクセンブルグやレーニンという当時の社会主義運動の指導者ばかりでなく、二人の連れ合い、子ども、孫などを含めた人的関係のなかにクララを位置づける。第2点、今日との関係については、①女性運動に対する社会主義者の男性の態度、②女性の経済的自立の可能性、③女性労働者保護、④[家庭的なこと]の位置づけ方、⑤女性を社会的変革運動に引き入れるための配慮点、⑥現代の国際的女性運動のつながりの、6つの点でクララの貢献を指摘する。

このような内容を有する本書から何を学び、何を考えたか。4点あげておきたい。

まず、巻末の資料・文献目録に示されるように、膨大な一次史料を駆使しつつ、細かな事実をしっかりと確定しつつ論を進めている点である。どんな細かなことであれ、著者は事実の確定に労を惜しまない。巻末年表にまとめられるような事実の経過を、ひとつひとつ積み重ねながら追っていく。今日と違い、海外の一次史料を読むことが容易ではなかった時代にあって、これだけの資料を渉猟した苦労は並大抵のことではなかったはずだ。敬服する。とりわけ有益なのは、クララの極めて多数の演説を記録していることである。迫力あるクララの声を彷彿

佛とさせる。プロレタリアの女性解放運動である以上、書かれたもの以上に、語りの力がひとを動かす。もちろん、女性労働者の大衆集会での発言よりも、運動家たちの会議における発言が主であるという限界はありつつも、彼女が何をどのように訴えたのかよくわかる。

第2に、人の思想形成には、意味を持った他者との出会いと対話がいかに大事かを学んだ。著者は、事細かに、クララが、いつ、どこで、誰と会い、どのような影響を受けたかを示している。その事実をもとにして、彼女の著作や演説の内容が分析される。そこには人との出会いと対話が思想をつくるという、全人格的な営みとしての思想形成と、それにもとづく実践が明示されている。随所に挿入された写真は単なるお飾りではない。クララをめぐる人びとの集いの形を示している。サークル型、サロン型、アソシエーション型、どの種の集まりとみるか議論の分かれるところかもしれないが、いずれにせよ歴史を動かすのは人と人の結びつきであることが示される。

第3に、社会全体の変革と女性の解放が結びつかなければならないという当たり前の命題を改めて確認できた。階級と男の支配からの解放は緊密に結合しなければならない。また、それは国境を超えて国際的に対処されるべきである。クララは、社会変革・女性解放・平和の運動が同軸のなかで連携されるべきことを主張し、強固な意思のもとで実践する。女性の視点の優位性が示される。いかなる質を持った、どのような形の「よい社会」を構想するかによって、女性の解放の質も決まってくる。

最後に、著者自身も強調するように、時代の構造がどのように女性運動の枠組みを作っているか、そのなかでいかなる制度改革を行うか、単なる言説分析にとどまらずに、時代の枠組み

と女性の置かれた現実社会の理解の重要性がくりかえし強調される。文化史や「語り」の歴史が、ともすると「物語」に堕しがちなのに対して、著者は真っ向から対峙する。この点については、評者も構造や制度をまったく踏まえない一部の研究に対する危惧を抱くので、共感できることが多い。ただ、評者は他方で、言語が指示対象を持たないという極端な説を別とすれば、言説分析がもつ有効性を取り込みつつ、より歴史像を豊かにする可能性もあると考える。この点については、「柔らかな実在論」の呼称で言語論的転回との提携を打ち出した遅塚忠躬の遺著『史学概論』（東京大学出版会、2010年）が参照されるべきであろう。

「社会主義」や「女性解放」という言葉がかつてほどの輝きを持たなくなった。しかし、われわれの「豊かさ」は、誰が、何と、どのように闘うことで勝ち取られてきたのだろうか。この歴史の達成が、多くの女性たちの運動と実践の結果としてもたらされてきたことを、いま一度謙虚に学ばなくてはならないし、歴史家はその闘いを描き続けなくてはならないだろう。「対象としての女性史」が拡張するのに反して、「方法としての女性史」が忘れ去られてはいないだろうか。体制変革や女性解放は決して過去の問題ではない。古典的な歴史学の方法を用いて書かれた本であるが、そこから学ぶことは決して少なくない。クララ没後80年を機に、本書を素材として、世代を越えた女性史をめぐる対話が活性化することを期待したい。（伊藤セツ著『クララ・ツェトキーン——ジェンダー平等と反戦の生涯』御茶の水書房、2013年12月刊、xxxii+1,027頁、15,000円+税）

（たかだ・みのる 甲南大学文学部教授）